

〔資 料〕

家族消費論: イタリアの Family Gathering の参与観察

木 村 純 子

はじめに

本調査は、イタリアの拡張家族 (extended family) の関係性とコミュニケーションの特性を読み解くことを目的とする。祝いあるいはハレの日という集まりの趣旨から、食料品の購買、調理、および食事・飲食といった食に関わる消費行為のみならず、消費者行動研究にとって重要な研究テーマであるギフト購買行動や儀礼的消費 (ritualistic consumption) などの多様な現象を観察することができ、そこにいる人々の関係性や繰り広げられるインタラクションをより深くとらえられることが期待できる。具体的には、40代になったイタリア人の兄姉妹4人とその家族が母親のもとに一堂に会した2日間のフィールドノートである。子どもたちが成長し家を出て自分自身の家族を持つ。40代にもなると兄姉妹が集まる機会は年に2回から3回ほどしかない。今回の集まりは三女の40歳の誕生日のお祝いのためである。イタリアでは、18歳で成人のお祝いがあり、その次は40歳を盛大に祝う。三女は1972年8月22日生まれで誕生日は過ぎているが、兄姉妹が集まれるのが9月29日だったのでこの日に誕生日パーティを開催することになったのである。次女カテリナの夫は仕事のために来られなかったが、それ以外は全員が集まれた貴重な機会である。

M 家の母親アンナは67歳で、エミリア=ロマーニャ州 F 市に介護を必要とする97歳の母と住み、夫と死別してからは民宿 (Bed & Breakfast) を営んでいる。母親には4人の子がいる。長女イザベッラは49歳の弁護士である。夫マルコは48歳で劇場館長を務めている。19歳の息子と17歳の娘と共に F 市の旧市街に住んでいる。

長男ミケーレは45歳の建築家である。妻エレナは40歳でマンション管理会社にパート勤めをしている。15歳の息子ニコロと5歳の娘ダリアがいて、夫婦と娘はミラノで暮らしている。次女カテリナは43歳の大学教員である。夫マルチェッロは43歳の大学研究員である。8歳の娘ベネデッタと共にヴェネチアに住んでいる。三女シルビアは40歳のスポーツインストラクターである。夫ルイジは40歳で海の家を営んでいる。5歳の娘マルタと共に F 市郊外に住んでいる。図1はM家の家系図を表している。

母親の手作り料理

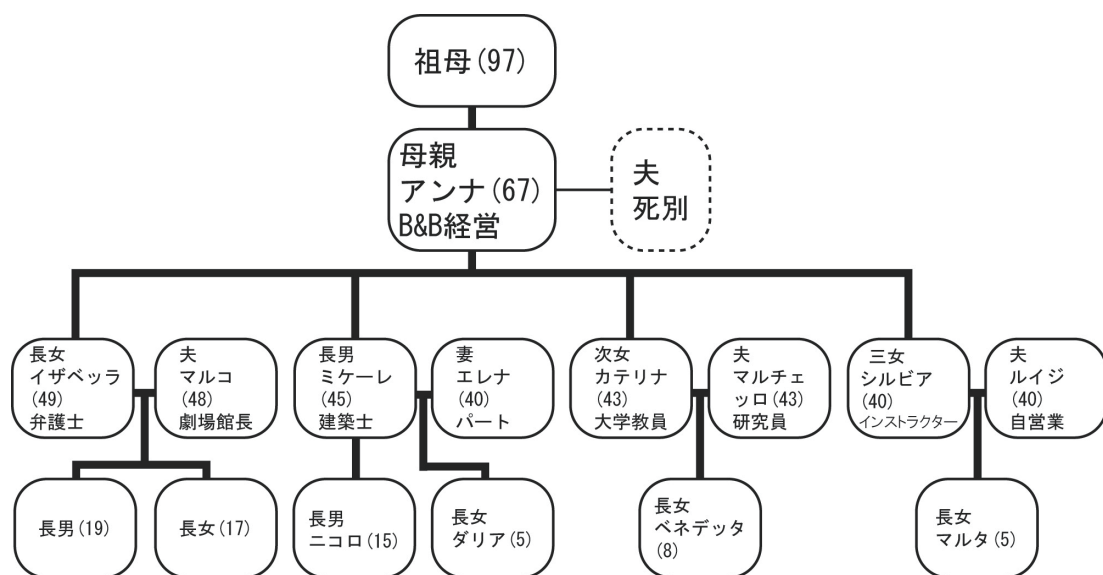
筆者は、次女カテリナと娘のベネデッタと共に2012年9月29日午前10時52分にヴェネチア・サンタルチア駅を出発し、12時20分にF市に到着した。プラットフォームで母親アンナの出迎えを受ける。次女カテリナはこの秋に小学校に入学した姪2人にまだ何も入学祝をしていないので、本を買うことにした。本屋は12時半に閉まるので店に駆け込んで数冊の本を購入した。

母親はパン屋に立ち寄った。F市はカボチャが特産品なので、カボチャを使った珍しいパンも売っていた。母親はF市の名物パン「コッピア (coppia)」を買うつもりだったが売り切れていたので残念がりながら、代わりのパンを買った。

母親の自宅兼民宿に到着した。母親は再婚相手の夫が亡くなった2年前に Bed & Breakfast をオープンして経営している。宿泊者用の部屋数は4部屋あり、イタリア国内外からのゲストが訪れる。

自宅に入っすぐに、次女カテリナとベネデ

図 1 M 家の家系図

(名前は仮名である¹⁾)

ッタと共に祖母のところに挨拶をしにいった。同じ建物だが入口やキッチンが別の2世帯住宅になっていて、97歳の祖母は住込みの介護ヘルパーと共に住んでいる。ちょうど昼食をヘルパーに食べさせてもらっているところだった。祖母はカテリナを認識していなかったが、カテリナは優しく話しかけていた。

母親アンナはすぐに昼食の準備を始めた。いつも夏はシチリアで過ごしたので、シチリア風のパスタを作ると言う。まず、テーブルのセッティングをする。美しいテーブルクロスを敷いた。イタリアではゲストを迎えるときにきれいなテーブルクロスを敷く習慣がある。

キッチンではすでに、ソフリットとトマトで作ったトマトソースとサイコロ状に切ったナスが用意されていた²⁾。母親が我々を駅まで迎えに来る前に作っていたものである。母親はオリーブオイルでナスを素揚げしていった。トマトソースとナスを別々に作るのは、ナスが苦手な人がいるかもしれないからである。パスタにかけるチーズは2種用意する³⁾。どちらかの好みがあるからという母親の配慮である。

ほどなくして長男家族がミラノから到着した。従姉妹同士の8歳のベネデッタと5歳のダリアは一緒に遊びはじめた。長男の連れ子となる15歳の息子はF市で暮らしているので、父と息子は久しぶりの再会なのであろう。一緒にバイクいじりをしていた。筆者が母親アンナに先日自宅でピッツアを作ろうとしてうまくできなかったことを話したところ、「では明日一緒に作りましょう」と言ってくれた。

大人7人と子ども2人の食事に、パスタを1キロゆがいた。トマトソースにナスをあわせ、そこにゆがいたパスタをあえた。その作業は長男の妻エレナがして、次女カテリナと共に各皿にパスタを盛っていった【写真1】。

14時ごろに食事が始まった。ワインは赤ワインが開けられた。長男は赤ワインにスパークリングウォーターを入れて飲んでた。筆者が「こういう飲みかたをするのか」とカテリナに聞くと「兄だけ」と言っていた。水は炭酸入りと炭酸なしが出される。人それぞれ好みがあり、好きな方を飲んでいる。カテリナは炭酸なしを飲んでいる。食事中は、母親が先日B&Bに宿泊

写真1 義姉と次女が各皿に料理を盛りつける



2012年9月29日筆者撮影

したゲストの1人が性同一性障害で、どのように接したらいいのか戸惑ったという話題や、長男夫婦が最近習い始めたダンスの話で盛り上がっていた。

デザートは母親の手作りの梨のチョコレートケーキである。食後のコーヒーはエスプレッソである。通常のエスプレッソマシンではなく、長男が仕事のクライアントだった職人からプレゼントされた珍しいマシンである。「この機械では、兄が一番上手にエスプレッソを入れることができます」と次女カテリナが教えてくれた。

食後、母親は台所で自家製のハーブ酒を混ぜていた。レモングラスを入れたアルコール度数が90度以上の強いリキュールである。15歳の孫息子が混ぜるのを手伝っていた。長男の妻と次女カテリナは片づけをしていた。

片づけが終わるとカテリナが「それぞれの部屋でちょっと昼寝をしましょう」と言った。今回のように週末の時間があるときには、昼食後に昼寝を取る習慣がまだ残っているようである。

ギフト・ショッピング

17時ごろに外出することになった。台所では、母親アンナが古い手書きのレシピメモの中から、明日作る予定のピッツアのレシピを探していた。今から材料を買うためである。

母親、次女カテリナ、ベネデッタ、および筆

者家族の5人は母親の運転で旧市街に向かった。出かける前に、疲れてしまったベネデッタが泣いていた。ベネデッタにとって祖母になる母親が運転しながら泣き止むように諭していた。週末ということもあり旧市街には駐車できるスペースが少なく場所を探していたところ、運よく長女イザベッラの自宅前に空いているスペースを見つけることができた。イザベッラとその娘が家から出てきた。娘はこれから友達のところへ自転車で遊びに行くという。

母親と長女イザベッラと次女カテリナの買い物のは、三女シルビアの誕生日プレゼントと一緒に買うことである。イザベッラが働いているオフィスの1階にある宝石店を訪れた。店主夫婦が応対する。イザベッラはまず預けていた自分のジュエリーを受け取り、次に三女のためのプレゼント用の宝石を出してもらった。店主が1つ1つ出してきては見せて、気に入らなければ次の商品を出してくる。この宝飾店でも、1点1点出してはひっこめるの繰り返しであった【写真2】。最終的に決めたのはダイヤモンドが付いたプラチナリングであった。選択した理由は、三女はスポーツインストラクターをしていて彼女のスポーティな雰囲気合うから、さらに長女の顔なじみの店なので必要であれば交換してもらえらるからとのことである。価格は490ユーロであった。母親と兄姉達がお金を出し合って買う。カテリナは夫の分もあわせて50ユーロ出していた。

18時半ごろになり、次女カテリナは娘ベネデッタの服を買うために洋服屋に走っていった。

写真2 三女へのギフト選び



2012年9月29日筆者撮影

8歳のベネデッタはこの1年で身長が伸び、秋冬シーズンの新しい服が必要だからである。残念ながら気に入った服は見つからなかった。車を駐車したところまで戻る途中にも洋服店があり入ってみたがやはり気に入るものはなかった。歩いている途中で母親アンナは、違う宝飾店を見つけそこでしばらく長女イザベッラと宝石を見ながら話をしていた。さきほど買ったものよりもいいものがあつたらどうしようと思っているようで、他の宝飾店の前を通るたびにショーウィンドウを覗いていた。筆者は歩きながら、長女イザベッラと話をしていた。彼女の職業が家裁の弁護士ということなのでイタリアでの離婚とキリスト教との関係、劇場館長を務めるご主人とのなれそめや仕事について教えてもらった。

19時にイーペルメルカート（ハイパーマーケット）のCO-OPがある大型商業施設に到着した。再会する時間と場所を決めておいて、母親アンナと筆者はCO-OPに、次女カテリーナとベネデッタは洋服店に向かった。我々の買い物の目的は翌日のピッツアの材料である。生きているリエビト（ビール酵母）、小麦粉、モッツアレラチーズ、トマトソース、F市名物のパン「コッピア」、長女に頼まれていたパスタ生地、「ピッツアにはコーラ」と母親が言うコカコーラ、「長男が好きだから」と母親が言うビールを購入した。レジはセルフレジである。2,000円弱の出費であった。ファッション専門店H&Mで買い物をしていたカテリーナ母娘と落ち合う。娘ベネデッタは洋服が見つかってご機嫌である。20時過ぎに自宅に戻った。ベネデッタは買ってもらった服を嬉しそうに全て着て従妹に自慢気に見せていた。

誕生パーティ

母親の古くからの友人ジジとジジの息子家族がやってきた。母親は長男に「車で行かなくても歩いて行ける」と言ったが、車3台に分かれて行くことになった。空には満月が輝いていた。アグリツーリズモのレストランに到着した。大人11人と子ども3人と筆者家族2人の総勢16人

の会食となる。ティーンエイジャーの子ども達3人（長女の息子と娘、および長男の息子ニコロ）は参加しなかった。それぞれ友達と遊びに行ったりアルバイトに行ったりしているとのことであった。

乾杯は3回行われた。まず、9月29日当日は聖ミケーレの日なので、同じ名前の長男ミケーレのために乾杯した。次に、8月12日が誕生日だった母親アンナのために乾杯した。最後は、三女シルビアの40歳の誕生日のお祝いのために乾杯した。誕生日ソングも歌った。三女は皆からのギフトを開けて、もらった指輪をさっそく指にはめていた。男性は興味を持っていなかったが、女性陣はしげしげと見入っていた。

メニューは長男ミケーレのみに運ばれ、彼が料理を注文した。料理はとりわけスタイルである。前菜には、F市地方ではピンツィーノ（pinzino）と呼ばれる揚げパンが何皿も運ばれてきた⁴⁾。生ハムとサラミの盛り合わせと、フレッシュチーズも出てきた。皿の数はそれぞれ6皿くらいだろうか。従業員がひっきりなしに次の皿を持ってくる。皆は次から次へと揚げパンを口に放り込む。まるでわんこそばを食べているようであった。

プリモピアット（1皿目）は、F市名物のパスタ・カッペラッチ（cappellacci）である⁵⁾。中にはF市の特産であるカボチャのペーストが入っている。こちらもわんこそばのように何皿も出てきては皆が平らげていく。カッペラッチは、何もかかっていないものとラグーソースがかかったものの2種類出てきた。

子供たちは適当に食べたらあとはどこかに遊びに行ってしまった。大人は11人いたが、ドラマや映画のように1つの話題に全員が入るというものではなく、2グループくらいに分かれて話していた【写真3】。長女の夫マルコと三女の夫ルイジが応援しているサッカーのチームは違っていて、ちょうどそれぞれのひいきのチームが対戦中らしく、ルイジは試合の行方を気にしていた。筆者はイタリア語をあまり理解できないためなかなか話題に入ることはできなかったが、次女カテリーナが何を話しているのかを日本語で説明してくれていた。途中で、三女の娘マ

写真3 誕生パーティでの談笑



2012年9月29日筆者撮影

ルタが泣き始めた。今晚は従姉のベネデッタとダリアが彼女らにとっての祖母（母親アンナ）の B&B に泊まるので自分も一緒に泊まりたいのだが、父親のルイジのお許しが出なかったからである。だがすぐに元気になって従姉たちと遊びはじめた。

デザートは6種類から選んだ。デザートを食べる者もいたし食べない者もいたし1皿を2人で分ける者もいた。筆者はジェラートを選んだ。次女カテリナはライスケーキを頼んだが、娘のベネデッタはジェラートを欲しがっていたので筆者は少しおすそ分けした。食後のカフェも飲む者と飲まない者がいた。最後は、長男ミケーレの話に全員が聞き入った。子どもの頃に悪戯をして父親に叱られた昔話である【写真4】。

賑やかなディナーが終わったのは23時近くであったが、子どもたちもまだまだ元気であった。この日、母親の B&B に泊まったのは、長男家族3人、次女カテリナと娘、および筆者家族2人の合計7人である。夜は誰もシャワーに入ることなく眠りについた。

ピッツァ作り

翌朝、朝食は午前10時ごろからであった。母親アンナがエスプレッソを淹れている時、長男の娘ダリアが紙で作ったメダルを持ってきた。母親は「この子はいつもこうやって私に金メダルをくれるの」と嬉しそうに言う【写真5】。前回受け取ったメダルが食器棚の扉にテープで留

められていた。前は美味しいケーキを作ってくれた金メダル。今回は美味しい料理を作ってくれた金メダルであった。ほどなくして次女の娘ベネデッタもアンナに宛てて書いた手紙を持ってきて渡していた。

長男夫婦はまだ寝ていたので、次女カテリナと娘ベネデッタと筆者夫婦の4人で食べた。朝食は簡単なものである。母親がテーブルに出してくれていたヨーグルト、パン、コーンフレークなどから、それぞれが食べたいものを選ぶ。ジャムは母親の手作りのイチゴジャムとブドウジャムであった。

母親は台所でピッツァの準備を始めた。生地が発酵するまでには7時間から8時間かかるため「生地を持って帰ってくれたらいいから」ということで生地だけ作る事になった。小麦粉500g、生のビール酵母、オリーブオイル、塩、および水をパン捏ね機で捏ねて、布巾をかけて、30度くらいに温まったオーブンに入れておく。昼食はラグーソースのタリアテッレの予定だという⁶⁾。作り置きして冷凍してあるラグーを室温に戻して解凍していた。

昼ごろになって台所を覗くと、筆者のためにいまからピッツァも焼いてくれると言う。発酵はまだ2時間ほどしかできていないため、生地が伸びなくて母親は「ああ、ダメだわ」と言いながら伸ばしていた。三女シルビアの家族も訪ねてきた。シルビアは生の生地をつまんで口に放り込んで「美味しい」と言っていた。買い物に出かけていた次女カテリナと長男夫婦が帰宅

写真4 長男の話に聞き入る



2012年9月29日筆者撮影

写真5 孫から祖母への金メダル



2012年9月30日筆者撮影

した。デザート用のお菓子を買ってきている。カテリナはパンを切るのを手伝っていた【写真6】。

母親アンナは、生地にとマトソースを塗り細かく切ったモッツアレラチーズを乗せる。塩とオリーブオイルもかけ、さらに「これはシークレットよ」と言いながらすりおろしたパルミジャーノも少しかけた。オーブンで焼いている間、手早くタリアテッレの準備もし、パプリカの蒸し焼きも作っている。孫娘たちにはシルビアが持ってきたカラフルなマカロニを別の鍋で湯でていた。長女イザベッラが豚のローストを作って届けてくれた。カテリナは筆者の研究テーマが家族の食に関わることを知っているので「純子さん、働いているお母さんはこういったもの(豚ローストの塊2個)を作り置きして冷凍しておいて、子どもたちが解凍して食べていくのです」と教えてくれた。

カテリナは「昼食までに義姉エレナと三女シルビアにインタビューをしたいならしますか」と尋ねてくれて、まず食事の前にエレナに対して限られた時間ではあるが子育てについてインタビューすることができた。三女にもインタビューを始めたが食事の時間になったので途中でいったん打ち切った。

ピッツァも焼き上がり、昼食の時間になった。長男夫婦と15歳の息子、三女夫婦、次女カテリナ、母親、および筆者家族の9人がテーブルにつき、母親が各皿にパスタを盛っていったところ、母親は少し量が足りなかったことに気づいて自分の皿にはよそらなかった。そのことについて誰にも気づかれぬように席につき、パンやピッツァを食べていた。皆は前夜のサッカーの試合のことや長男の息子が始めたアルバイトについて賑やかに話をしていた。話題が尽きることはない。子ども達3人は屋外のテーブルで子ども達だけで食べていた。母親の手作りピッツァは皆が美味しい美味しいと言って、あっという間になくなった。デザートはカテリナが買ってきたカンノーリとシュークリームだった。母親がエスプレッソを淹れてくれた。母親は手作りのキンカンのリキュール漬を皿に並べて出そうとしたが、自分がまず1つ食べてみて「リキュールがきつすぎてダメだわ」と言って皆に出すのをやめた。

食後、三女シルビアにインタビューの続きを行った。次女カテリナは筆者に「帰りは16時43

写真6 母親の手伝いをする次女



2012年9月30日筆者撮影

分発の電車に乗るので、16時15分にここを出ます」と言った。16時15分になっても、カテリナはまだ台所の片づけをしていた。陶器のスプーンを床に落として割ってしまって悲しんでいた。

16時25分に母親の運転で駅に向かった。電車の出発までほとんど時間がないので、カテリナが4人分の切符を買い、筆者はカテリナの荷物を持って先にプラットフォームに行って待つという連携プレーによって電車に間に合うことができた。ヴェネチアのサンタルチア駅に戻ったのは18時であった。

おわりに

次女カテリナに誘われ、1年に2回か3回しかないという親戚の集まりに参加し、彼らのインタラクションや購買行動を2日間つぶさに観察することができた。今後の研究の手がかりとなることが期待される、日本人の筆者の目にユニークに映る光景を見た。

1つ目に、M家では身体接触が高頻度で見られた。大人が小さな子どもに対して接触するだけではなく、大人同士もするし【写真7】。男性同士の親子でもする【写真8】。身体接触と関係性との関係については Hall (1966) が対人関係と物理的距離には相関があると主張しているが、M家の親密さはM家特有のものなのか、イタリアの文化的特性なのかは分からなかった。

写真7 母親と次女とのスキンシップ



2012年9月29日筆者撮影

2つ目に、日本で子ども達が40代以上になってから親戚一同が集まるのは結婚式や法事など冠婚葬祭というあらたまった機会であろう。そこでのやりとりはおのずとしきたりやマナーにのっとったものになる。他方、M家が今回集まったのは三女の40歳の誕生日パーティのためであった。レストランでのディナーの料理はコース料理ではなく、その場で長男が決めたメイン料理も省いた前菜とプリモピアット（多くの場合がパスタやピッツァなどの炭水化物）とデザートであった。ギフトをプレゼントされていたものの、会食の支払いは主役の三女もきちんと割り勘にされて30ユーロ出していた。慣習にとられないカジュアルな集まりであったと言える。

3つ目に、日本であれば嫁いだ娘が藪入りで実家に帰ってきたら日常生活の家事から解放されリラックスし、嫁が義父母の家を訪ねるとなるとあれこれと気をつかうものであろう。他方、M家では娘が母親の手伝いをまめにしていた。嫁の立場となる長男の妻エレナはそうと教えられなければならないくらい M 家になじんでいた。

筆者が観察したこれら3つの点は、いずれも関係性とインタラクションに関わる現象である。今後、これまで消費者行動研究で蓄積されてきた、人と人との関係性とそこで繰り広げられるコミュニケーションの理論枠組みを用いて読み解いていく必要がある。

写真8 長男と息子とのスキンシップ



2012年9月29日筆者撮影

本研究は既存の枠組みでは説明できない現象も確認した。既存研究の限界の1つ目はギフトの購買行動に関連する。既存の研究ではギフトの贈り手と受け手はそれぞれ1人を想定しているケースがほとんどである。贈り手と受け手の関係性によってギフト選択の暗黙のルールが存在し、ルールに沿った消費行動をすることで関係性を強化、あるいは再構築できると言われてきたが (Caplow1982; Caplow1984), 本研究のギフトの贈り手は複数であったため、既存の枠組みでは説明ができない。ギフト・コミュニケーションを1人対1人のインタラクションとしてのみとらえてはいけなことが示唆される。

既存研究の限界の2つ目は動態的な視点が欠けている点である。Wallendorf & Arnould (1991) は北米での感謝祭の日の家族の集まりの参与観察を行い、慣習に乗っ取った消費行為と家族の関係性との関連を明らかにしたが、そこでの関係性とはある祝祭の日のみに確認されたものである。同様に、本研究のフィールドワークも過去から現在にいたるまで変化しながら続いてきた家族の関係性とインタラクションのほんの一瞬を切り取ったに過ぎない。兄妹が成長した現在は明るく楽しいコミュニケーションが繰り広げられていたが、その現象はそこに至るまでの様々な出来事や関係性の変化を土台にしている。次女が若いころには両親との確執もあったようであり、母親に食事を作ってもらった思い出はあまりないとも語っていたが (木村2012), 2012年9月29日という限定された時間を切り取ると母親との過去の不安定だった関係性はみじんも感じられない。したがって、既存の消費者行動研究のように、目の前の現象だけから関係性を解釈しては不十分で、過去の時間やコンテキストを取り入れた継時的で動態的な視点を持つ理解が求められる。

【注】

- 1) 長女イザベッラの2人の子どもはフィールドワークの中の消費行為に全く関わらなかったため、名前を記載していない。
- 2) ソフリットは、タマネギ、ニンジン、セロリと

いった香味野菜をオリーブオイルでじっくりと炒めて作るイタリア料理の隠し味である。

- 3) パルミジャーノレッジャーノとペコリーノをそれぞれすりおろした。
- 4) ピンツィーノはラードで揚げた一口サイズのパンである。
- 5) カッペラッチはナポレオンの帽子の形をした詰め物パスタのこと。
- 6) ラグーソースはミートソース。タリアテッレは平たいきしめんのようなパスタのこと。

参考文献

- Caplow, Theodore. (1982) "Christmas Gifts and Kin Networks," *American Sociological Review*, 47, 383-392.
- Caplow, Theodore. (1984) "Rule Enforcement Without Visible Means: Christmas Gift Giving in Middletown," *The American Journal of Sociology*, 89 (6), 1306-1323.
- Hall, E.T. (1966) *The Hidden Dimension*, Garden City, NJ: Doubleday Anchor. (日高敏陸・佐藤信行訳 (1970) 『かくれた次元』 みすず書房.)
- 木村純子 (2012) 「家族消費論:アイデンティティ形成と消費者行動に関する序論的考察 (1)」『経営志林』第49巻第3号, 105-114ページ。
- Wallendorf, Melanie. & Arnould, Eric. (1991) "We Gather Together: Consumption Rituals of Thanksgiving Day," *Journal of Consumer Research*, 18, 13-31.